台湾の社区営造における地域活性化の特質

小　室　達　章　　後　藤　昌　人　　高　橋　和　文
Tatsuaki KOMURO　　Masato GOTO　　Kazufumi TAKAHASHI

岩　崎　公弥子　　時　岡　　新　　中　田　　平
Kumiko IWAZAKI　　Arata TOKIOKA　　Hitoshi NAKATA

Characteristic of the Local Revitalization in Community Development in Taiwan

1．研究の概要

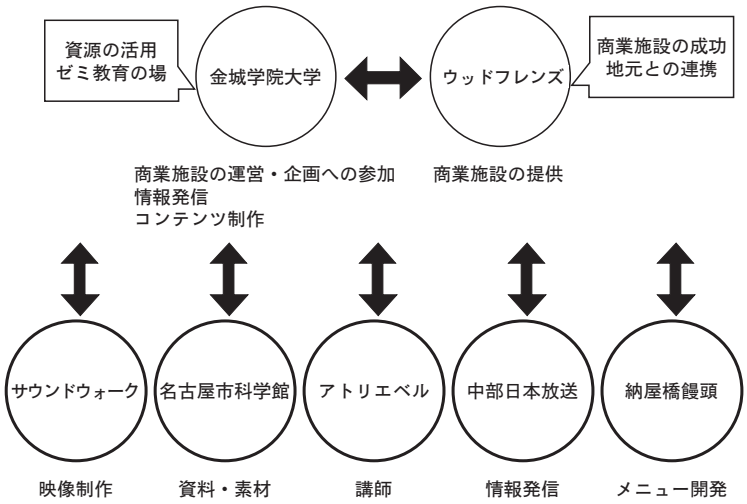
本研究は、2009年度におこなわれた金城学院大学人文・社会科学研究所の共同研究「納屋橋地域活性化プロジェクト」に引き続き、産学連携や地域住民の参加が、地域活性化にどのような影響を及ぼすのかを調査することを目的とする。特に、地域活性化について特徴的な取り組みをしている事例について、現地へのヒアリング調査をおこなうことで、地域活性化の詳細だけでなく、それに取り組む人々の考え方や姿勢などを浮き彫りにしていきたい。「納屋橋地域活性化プロジェクト」では、2009年２月から2010年３月にかけて、企業、大学教員（研究担当者）、およびそのゼミ生の協働により、「ほとりす名古屋納屋橋」という商業施設（ギャラリーなどを併設できるカフェとレストラン）でのメニュー、グッズ、イベント等の企画・運営、Webコンテンツ制作、情報発信などおこない、実際に研究担当者自身が地域活性化に携わりながら、名古屋市の納屋橋地区がどのように活性化されていくのかを調査した[1]。2010年度の金城学院大学人文・社会科学研究所の共同研究では、海外での地域活性化の先進事例のヒアリング調査をおこない、地域活性化がどのように展開されているのかを考察していきたい。特に、地域住民が積極的に地域活性化に参加する事例として、台湾の「社区営造」を調査し、地域活性化の方向性や、地域活性化に取り組む人々の考え方を明らかにしていきたい。

[1]「ほとりす名古屋納屋橋」での取り組みについては、小室他（2010）を参照。

2．これまでの研究と問題意識

本研究では、2009年２月から2010年３月の間に「納屋橋地域活性化プロジェクト」として、産学連携や地域住民の参加が、地域活性化にどのような影響を及ぼすのかを調査してきた。それは、デジタルコンテンツ制作、放送コンテンツ制作、Web制作、CG制作、動画制作、マネジメントなどを専攻する金城学院大学と、「ほとりす名古屋納屋橋」という商業施設を運営するウッドフレンズとの産学連携によって、当該商業施設を協働で運営することで、その周辺地域である納屋橋地区の活性化を目指すというものである。また、国内の地域活性化の現状を視察することで、地域住民の参加がどのように地域活性化に寄与するのかも調査した。石川県金沢市の浅野川沿い、犀川沿いの地域活性化について、旧石川県庁の跡地利用、浅の川園遊会の実施、地元名産品のネット販売、和菓子の制作などについて、県庁や各企業の担当者へのヒアリング調査をおこなった。

これらの研究から得られた含意は、次の２点である。第一に、産学連携による「ほとりす名古屋納屋橋」の運営では、各種活動の中で、多様な組織間協力が形成され、新しい協力関係が作られた。この意図せざる協力関係の広がりが、連携事業を成功させ地域活性化を盛り上げるのに寄与した（図１参照）。具体的にいえば、金城学院大学とウッドフレンズとの産学連携は、１つの大学と１つの企業という一対一の連携として始まったが、この一対一の連携だけではそれぞれの活動が十分な活動成果を得られない、もしくは、自らの資源を十分に活用できないという状況に直面する。そこで、この状況を解消する資源を有する主体と連携を組むことで、こうした状況に対応してきたのである。



出典：小室他（2010）

図１：納屋橋地域活性化プロジェクトにおける連携の広がり

直面する課題への対応という、この偶発的なできごとの積み重ねにみえる現象が、新しい地域活性化のシナリオになる可能性を秘めていると考えられる。

第二に、石川県金沢市の浅野川沿い、犀川沿いでの地域活性化では、何か特別に新しい地域資源を造り出すということよりも、現有の地域資源を有効に活用するという意図によって、地域活性化が促進されてきた。現有する地域資源に、何らかのさまざまな工夫を加えることによって、その地域資源の魅力を高めていく努力をおこなっており、それが地域活性化につながっていた。つまり、限られた資源を有効に使うという意図が明確にあり、自らのできうる範囲での地域活性化が展開された結果、その地域での住民や関係者の参加が促され、地域活性化としての盛況をみせていた。

以上のことは、実際に地域活性化に携わり、地域活性化の担当者へのヒアリング調査を通じて明らかになったことであり、実際の現場に赴く重要性を認識することにつながった。本研究でも、これまでの問題意識を踏襲し、さまざまな地域での地域活性化のモデル事業を参考にしながら、これらの地域がどのように地域資源を有効に活用して、地域活性化を展開しているのかをみていくことにしたい。特に、国内だけでなく、海外でもおこなわれる地域活性化の取り組みを視野に入れたヒアリング調査をおこないたいと考え、台湾台南縣の社区営造の取り組みについて視察をおこなうことにした。

3．台湾の社区営造

本研究では、2010年10月21日から24日にかけて、台湾台南縣の社区営造の取り組みについて、それぞれの社区営造の担当者に対してヒアリング調査をおこなった。

台南縣は、台湾の南西部に位置しており、北は嘉義縣嘉義市、南は台南市と高雄縣に接している。総面積が2016平方キロメートルで第9位、耕地面積は9万余ヘクタールで第1位、人口は約110万人で第8位となっている。県政府の所在地は新営市で、2市7鎮22郷のあわせて31の行政区分が存在する。県全域が北回帰線の南にあり、亜熱帯モンスーン気候で、水稲、マンゴー、蓮の実、文旦、サトウキビ、パイナップルなどの農作物の生産が盛んである。また養殖漁業と沿海塩業なども盛んで、台湾の主な農漁業産地となっている。このように台南縣の主な産業は、農業・林業・漁業であったが、近年は、ソーラーパネルを製造するなど、商工業を中心とした産業構造に転換してきている[2]。

ここで社区営造について概説しておこう。「社区」とは、いわゆる「コミュニティ」のことを意味し、ある地域の中に、その地域に対するアイデンティティや共同意識を持っ

[2] 台南縣については「南台湾農業再生」を参照。ただし、台南縣の概要および行政区分は、ヒアリング調査をおこなった2010年10月現在のものであり、2010年12月25日に台南縣は台南市に統合されており、現在の台南縣の概要および行政区分は、本論文で示されているものとは異なっている。

ている住民たちが構成した共同体を表す言葉である[3]。また、「営造」の「営」がソフトウェア、「造」がハードウェアを表し、「営造」とは、社区の共同意識や組織づくりなどソフトウェアの「経営」と、公共空間や施設、住宅などハードウェアの「建設」を意味している。台湾での社区営造の始まりには、反中央集権的な風潮が生じる中、民主的な社会・文化の解放の一環として参加型のまちづくりという考え方が生まれてきたこと、また、公害の発生や環境汚染に対して、地方が反公害運動や反環境悪化運動を始めたという背景にあるといわれている。そのため、社区意識や住民主体が大切であるということが強調されており、由下而上（ボトムアップ）方式という言葉が良く使われている。つまり、コミュニティ内の共同意識や組織作りを通して、また、公共空間や公共施設作りを通して、コミュニティそのものを活性化させていく社区営造は、住民参加型の地域活性化を調査し、その特質を明らかにしていくという本研究の問題意識に合致する事例に他ならないといえる。

調査方法については、台南縣政府の協力と、台南縣政府新大同社會營造中心の案内のもと、曲溪社區（大内鄉）[5]、總爺文化區・總爺總榮社區（麻豆鎮）、龍山社區（七股鄉）、土溝社區（後壁鄉）、竹門社區・詔安社區（白河鎮）、菁寮社區（後壁鄉）、南紙社區（新營市）など各社区の担当者に対して、現地ガイドの通訳を介してのヒアリング調査

表１：ヒアリング調査をおこなった社区

社　　区	所在地	社区営造の取り組み	担　　当
曲溪社區	大内鄉	自然学習・教育	大内鄉曲溪社區發展協會
總爺文化區・總爺總榮社區	麻豆鎮	史跡の保存、民家の再利用	南瀛總爺藝文中心
龍山社區	七股鄉	民家の保存、廃棄物の再利用	七股鄉龍山社區發展協會
土溝社區	後壁鄉	村内交流、河川浄化	土溝農村文化營造協會
竹門社區・詔安社區	白河鎮	休憩所の設置	白河鎮竹門社區發展協會 白河鎮詔安社區發展協會
菁寮社區	後壁鄉	農村再生	芳榮米廟
南紙社區	新營市	施設の再利用	新營市南紙社區發展協會

[3] 社区営造の概要や歴史的背景については、「台湾の参加型まちづくりと震災復興について」を参照。
[4] 台南縣政府新大同社會營造中心とは、台南縣政府の社区営造を推進する部署のことである。詳しくは「台南縣政府新大同社會營造中心」を参照。
[5] 「社區」という表記について、現地の社区は、地名などと同様に固有名詞として認識される場合が多いため、本論文でも、固有名詞として社区を表記する場合は、日本語での一般表記としての「社区」でなく、「社區」という表記を用いる。

をおこなうというものである（表１参照）。以下、それぞれの社区の取り組みについて概説し、地域活性化としての特質について考察していきたい。

４．社区の取り組み

（１）曲溪社區（大内郷）

曲溪社區は、台南縣大内郷の山間の森林地に位置し、豊かな自然に囲まれている。曲溪社區にとっての自然とは、植物であり、動物であり、昆虫であり、地形であり、果物であり、これらの自然が曲溪社區の貴重な地域資源となっている。社区営造としての取り組みも、これら自然からもたらされる地域資源を活用するという方向でおこなわれている。もちろん、そこにはさまざまな工夫が凝らされていて、特に、自然学校の設立を通じて、子供たちに、この曲溪社區の魅力的な地域資源である自然について学んでもらうだけでなく、その自然の魅力をガイドしてもらうという手法をとっている。自然の中で体験学習をおこない、そのためのガイドブックを作成するなど教材も充実している。ヒアリング調査の際も、曲溪社區の子供たちに社区営造についてプレゼンテーションをしてもらった（写真１参照）。いわゆる「学校」での教育とは違い、「社区の中の自然学校」での体験教育を実施するために、自然学校を設立し、さまざまな体験学習をおこなうことで、地域の子供たちが自分たちの社区の魅力への理解を深めていくというのが、曲溪社區の社区営造の取り組みである。

また、曲溪社區では、観光資源として「悪地」を活用したいという展望をもっている（写真２参照）。悪地とは、堆積岩の地表に雨水などの浸食で生じた小谷が無数に刻まれ、人・動物の居住や歩行も困難で、植生もほとんどない地形のことである。泥岩など浸透能が低い上に急斜面のため、雨により土壌が流出してしまい植物もほとんど生えず、岩肌がむき出しとなっている。いわゆるバッドランドとよばれる地形のことである。今でも観光客が来訪しているとのことだが、この世界でも珍しい悪地地形を観光資源として

写真１：社区の説明をする自然学校の子供たち（著者撮影）

写真２：悪地地形（著者撮影）

どのように活用していくのかが、曲溪社區の今後の課題になるであろう。

（2）總爺文化區・總爺總榮社區（麻豆鎮）

總爺文化區は、台南縣麻豆鎮の郊外に位置し、製糖場跡地を利用した文化園である。この製糖場は、日本統治時代の日本企業が経営していたもので、当時の社屋や社宅が保存され、樹木に囲まれて陳列している（写真 3 参照）[6]。1906年、渋沢栄一がこの地に明治製糖株式会社を設立し、各種設備を整えて製糖がおこなわれた。戦後、台湾に譲渡され、運営を継続するが、1993年に閉業することになった。その後、敷地を分割するという計画もあったが、地域の陳情によって古跡の認定を受け、製糖場のさまざまな施設が残されることとなった。製糖場の施設を保存するという努力だけでなく、案内板や遊具を設置し、その地域の動植物をモチーフとしたオブジェを飾るなど、細やかな工夫もなされている。このような地域の動きのお陰で、總爺文化區は、この地域の貴重な観光資源となっている。また、地域住民の散歩コースになっているなど、總爺地域の生活にも溶け込んでいる。

總爺總榮社區は、總爺文化區のすぐそばの社区で、伝統的な台湾の家屋が並ぶ古い住宅地である。伝統的な台湾の民家は、赤煉瓦の塀に囲まれて、屋根は薄くて赤い瓦が使われ、コの字型に構えられた平屋作りの家屋である（写真 4 参照）。どっしりした構えにみえるのだが、台風や地震などの災害には強くない。そのため、現在ではあまり住むことがなくなっているという。この伝統的な台湾の民家を利用するというのが、總爺總榮社區の社区営造の取り組みである。誰も住まなくなった家屋を、美術を専攻する大学院生に貸し出し、工房として利用してもらい、彼らの作品作りを支援するというものである。家屋そのものは、工房として機材などが置かれているが、その近くに、廃材など

写真 3 ：總爺文化區の旧明治製糖株式会社の社屋
（著者撮影）

写真 4 ：伝統的な台湾家屋とその向こうにみえる工房
（著者撮影）

[6] 總爺文化區については、「南瀛總爺藝文中心」を参照。

を利用して作成された建造物が建築されている。廃材を利用して建築された建造物は、そこに登ると、その社区の街並みが一望できるなど、今や、總爺總榮社區のシンボル的な存在となっている。古い民家のならぶ住宅地で、使われなくなった家屋を、学生のために利用しようと取り組んでいるのが、總爺總榮社區の社区営造である。

（3）龍山社區（七股鄉）

龍山社區は、台南縣でも海沿いの七股鄉に位置し、牡蠣などの海産物を特産品としている社区で、いわゆる漁村である。ここでも、總爺總榮社區と同様に、伝統的な台湾の民家が建ち並んでいる。龍山社區の社区営造としての取り組みは、社区内の民家を利用するというものだが、利用の仕方が特徴的である。それは、家屋の壁や塀に色とりどりの絵を描くというものである。その絵も、龍山社區という漁村らしく、海や岸辺の風景、漁師が働く様子、魚、貝殻、水鳥などをモチーフにしたものとなっている（写真5参照）。民家の壁や塀に絵を描くだけという取り組みなのだが、それぞれの民家が工夫を凝らして、それぞれの表現方法で生活空間としての漁村に彩りを添え、社区の街並みを歩くことに楽しみを与えてくれるものとなっている。

また、龍山社區のはずれに小さな公園があり、公園の芝生の中に、牡蠣の貝殻を敷き詰めた歩道がつくられ、そこを歩くことができる（写真6参照）。もともとは、ゴミなどが捨てられている空き地だったのだが、住民らが整地し、芝生や樹木を植え、囲いをつくり、牡蠣の貝殻を敷き詰めて遊歩道にしたというものである。龍山社區は、牡蠣がよくとれるということもあり、漁村のいたる所で、牡蠣の貝殻が束ねて捨てられているが、その捨てられている牡蠣の貝殻という資源を有効に活用しようというのが、この取り組みの特徴である。牡蠣の貝殻は、それこそ捨てるほどあるため、今後、新しい利用方法を考えていくのが、龍山社區の課題となっている。

写真5：民家の壁に描かれた絵（著者撮影）

写真6：牡蠣の貝殻を利用した遊歩道（著者撮影）

（4）土溝社區（後壁鄉）

台南縣の社区営造で最も成功したといわれる取り組みが、土溝社區の「土溝最後一頭水牛」である。これは、農作業用に飼われていた水牛が村で最後の１頭となってしまい、その最後の一頭の水牛を使って伝統的な農業を続けようという老人に、地元住民や学生が協力して、新しい牛舎を建造するという取り組みである。現在、その水牛は、すでに死んでしまったものの、「土溝最後一頭水牛」によって社区住民の交流やつながりの重要性を認識することとなった。社区住民たちが拠点としたのは、かつての豚小屋を自らの手で改築した土溝農村文化学堂であり（写真７参照）、そこで交流することで、社区を大事に思う心が養われていったのである。

そして、社区を大事に思う心から新たに生まれてきた取り組みが、「水水的夢」である（写真８参照）。これは、地域内の河川や田畑の水環境を改善し、住民が遊んだり、歩いたり、生き物にふれあえるような環境を取り戻すという、いわゆる河川浄化の取り組みである。この「水水的夢」は、日本の源兵衛川の河川浄化の取り組みを参考にし、日本人の専門家が関わるなど、目的意識の非常に高い取り組みになっており、国内外からの注目も高い。しかし、拠点となる公園を自らの手で整備し、河川の清掃をおこなっているものの、実現に向けての取り組みの途中という段階である。

（5）竹門社區・詔安社區（白河鎮）

竹門社區・詔安社區がある白河鎮では、蓮の花の生産量は台湾全体の３分の２を占め、「蓮の郷」という美称で呼ばれている[7]。そのため、蓮とその加工品が特産品となっている。蓮の花はお茶に、葉は荷葉飯に、蓮根や実はさまざまな料理の具材に、果実や実胚芽は漢方薬の材料になり、蓮が白河鎮を代表する地域資源となっており、この蓮を活用した地域活性化もおこなわれてきた。例えば、白河陶访という陶芸工房では、蓮料理の

写真７：村人が集う場所（著者撮影）

写真８：水水的夢のポスター（著者撮影）

[7] 白河鎮については、「台灣地方特色網」を参照

創作料理を提供するなど、蓮を観光資源として活用しようとしている。しかし、近年、白河鎮のいくつかの社区が一緒になって、新しい方面で社区営造に取り組むようになってきた。それは「鐵馬駅站（自転車の道の駅）」を作るというものである。

蓮の郷白河鎮は、春には蓮の種まき、夏は蓮の実採り、秋、冬にはレンコン粉の製作体験ができるなど、季節を通じて、自転車でサイクリングするのに適した場所である。一年中を通じて、自転車で白河鎮を訪れる観光客も多い。さらに、折しも今、台湾では、自転車で台湾を一周することが流行っており、自転車で台湾の観光地を巡る現地の人も年々増加している。そこで、このように自転車で白河鎮を訪れる観光客に対して、何か提供できるものはないかと考案されたのが、鐵馬駅站という自転車版の道の駅である。

鐵馬駅站は、ヒアリング調査に訪れた際には、竹門社區に１カ所、詔安社區に２カ所に作られており（写真９、10参照）、今後さらに増やしていく計画である。竹門社區の鐵馬駅站では、樹木に囲まれた緑地が整備され、休憩所、手洗い場、郷土の資料館が設置されている。詔安社區では、竹で造られた休憩所が設置されている鐵馬駅站と、住宅地の中の公園を改良した鐵馬駅站が整備されている。この竹門社區・詔安社區を中心とした白河鎮の社区営造の取り組みは、今後、多いに盛り上がりをみせることが期待される。

（６）菁寮社區（後壁郷）

後壁郷にある菁寮社區の社区営造は、伝統的な農法で最高品質の米を作り、農村を再生させていくという取り組みである。後壁郷は、台湾でも有数の穀倉地帯であり、後壁郷にある菁寮、墨林、後廓の３つの村から成り立っているのが「無米樂社區」である。

写真９：竹門社區の鐵馬驛站（著者撮影）

写真10：詔安社區の鐵馬驛站（著者撮影）

この地域で収穫される高品質な米の名称を「無米樂」といい[8]、台湾でも非常に有名なブランド米となっている。

後壁郷の「無米樂」が有名である理由が、もう１つある。非常に有名なドキュメンタリー映画『無米楽』の舞台となっているのが、この後壁郷なのである（写真11参照）。農地が次々と工業用地へと転用されていく工業化という時勢の中、政府は農業保護地区を制定し、農業保護地区の指定を受けた後壁郷菁寮社区でも、その地域に工場を建てることができなくなった。そのため村の若者たちが都市部に出ていくようになり、村は高齢化していく。しかも、台湾のWTOの加盟によって、米の価格が下落し、政府からは保証金と引き換えに休耕が命じられる。それでも生活のため黙々と米作りを続けていく農家の様子を描いたドキュメンタリー映画である。どのような状況に置かれようとも、黙々と農作業を続けてきた農家の営みの中から作られた米が、この「無米樂」なのである。

菁寮社區では、この「無米樂」の舞台として対外的にアピールすることで、一躍、観光地としても有名になり、また、お酒、米菓子など、各種米製品を展開するなど、「無米樂」という資源を十二分に活用している（写真12参照）。ドキュメンタリー映画『無米楽』をきっかけに、台湾では農村を再生させる動きもでてくるようになった[9]。菁寮社區の社区営造は、それを先導する取り組みといえるだろう。

写真11：有名な映画の舞台である後壁郷（著者撮影）

写真12：米から作られる酒製品（著者撮影）

[8] 無米樂とは、「米がなくても楽しい」という意味で、米作りを楽しむ農家の考え方を意味していると考えるが一般的である。映画『無米樂』の英題も「Let it Be」である。ただし、「米が無ければ楽しいのに」という農家の悲哀を表しているという解釈もできる。

[9] 農村の再生については、「南台湾農村再生」を参照。

（7）南紙社區（新營市）

台南縣の県政府所在地である新營市の社区で、廃棄された施設を別の用途で再利用するという社区営造の取り組みがおこなわれている。南紙社區の「卸鹽台花園」である。「卸鹽台花園」では、廃棄された鉄道施設を再利用して、遊歩道や農園を造営し、市民が市街地で散歩をしたり、菜園をつくる機会を提供する。

廃棄されていた鉄道は台湾糖業鉄道の施設で、かつて製糖にともなうサトウキビや、糖製品輸送のために設けられたもので、卸鹽台花園では、すでに廃業した路線の一部を利用している。台湾糖業鉄道の線路は、市街地を縦貫するように敷設されており、敷地を整備することで、市街地・都市型の遊歩道になる（写真13参照）。また、敷地の整備には、樹木を植えたり、石を敷き詰めたり、休憩所を設置したりと、市民が歩きやすいように工夫がされている。さらに、線路脇の空き地を農地にすることで、市民が市街地で農園をつくることができるようになる（写真14参照）。

線路以外にも、鉄道の敷地には、駅舎、倉庫、プラットフォーム、踏切、車両など、各種の施設が存在し、これらをどのように活用するのかが問われてくることになる。そのため、「卸鹽台花園」の設計には、社区のメンバーはもとより、建築家などの専門家も関わって、これらの施設を有効に活用しようとしている。鉄道の敷地内には、使用されていない施設がまだまだあるため、今後も発展していくことが期待できる取り組みである。

5．地域活性化としての社区営造

以上、曲溪社區（大内郷）、總爺文化區・總爺總榮社區（麻豆鎮）、龍山社區（七股郷）、土溝社區（後壁郷）、竹門社區・詔安社區（白河鎮）、菁寮社區（後壁郷）、南紙社區（新營市）の社区営造の取り組みの概略をみてきた。最後に、地域活性化としてこれらの社区営造をとらえた場合の特徴をまとめておこう。

写真13：線路を遊歩道に（著者撮影）

写真14：線路脇の農園（著者撮影）

第一に、社区住民はもちろんのこと、学生や子供たちの参加がみられるということである。特に、曲溪社區では、自然学校での学習を通じて子供たちが、總爺總榮社區では、芸術を専攻する大学院生が、また、土溝社區の「土溝最後一頭水牛」「水水的夢」でも学生が参加するなど、次世代を担う若者が社区営造に上手に入り込んでいる。

第二に、廃棄もしくは放置された資源を活用するという取り組みが多くみられた。特に、總爺文化區・總爺總榮社區では、閉鎖された工場跡地や使われなくなった民家を、龍山社區では、廃棄される牡蠣の貝殻を、南紙社區では、廃止された鉄道施設を、上手に利用して、特別に新しい資源を作り出すことなく、有効な社区営造へとつなげている。

第三に、流行や時代の流れを上手に取り込んでいるということである。特に、土溝社區の「土溝最後一頭水牛」は台南縣で最も有名な取り組みとして知られているし、菁寮社區の「無米楽」は、ドキュメンタリー映画『無米楽』のヒットをきっかけとしているし、竹門社區・詔安社區の鐵馬駅站も、自転車で台湾を一周するブームに上手に乗じているといえる。必ずしも古いものを大事にしているだけでなく、時勢に乗ることも意識している。

第四に、これは日本人の我々にとってもうれしいことだが、日本統治時代に持ち込まれたものが、社区営造に使われていたり、日本の大学と協力しながら社区営造がおこなわれている。總爺文化區は、明治製糖株式会社の製糖工場の跡地であるし、南紙社區の「卸鹽台花園」も、その糖の輸送を引き継いだ台湾糖業鉄道の線路跡地を利用している。また、竹門社區・詔安社區がある白河鎮の特産品である蓮も、日本から持ち込まれたものである。土溝社區の「水水的夢」は、日本の源兵衛川の河川浄化の取り組みを参考にし、日本の研究機関の協力を受けている。このように、日本から引き継いだものを大切にし、また、日本で生まれた知識や技術を活用していることも大きな特徴であろう。

最後に、それぞれの社区営造には、専門家のサポートがあるというのも大きな特徴であろう。菁寮社區の「無米楽」では農家が、土溝社區の「水水的夢」では日本の研究機関が、南紙社區の「卸鹽台花園」では建築家が、社区営造に協力している。社区営造が本格的に展開するにつれ、それぞれの分野での専門知識や技術が必要になってきた場合、当然、それらを補完する専門家の協力が必要になってくる。成功的な結果を残している社区では、専門家が上手にサポートしている。

ここで、台湾での社区営造による地域活性化の取り組みを、「納屋橋地域活性化プロジェクト」や金沢でのヒアリング調査で得られた、これまでの本研究での知見と照らし合わせてみたい。上述したように、本研究では、意図せざる協力関係の広がりと、地域内の限られた資源を活用することが、地域の人々を地域活性化の動きの中に巻き込み、それが地域活性化の進展につながることを明らかにしてきた。台湾での社区営造も、こ

れらも動きがみられるかどうかということを検討してみたい。

まず、意図せざる連携の広がりについて、それが顕著にみられたのは、土溝社區の「土溝最後一頭水牛」という取り組みから、「水水的夢」へと社区営造の焦点が移りゆく過程において、日本人の専門家などの協力体制が得られていくというものであろう。地元住民や学生が協力して、新しい牛舎を建造するという取り組みが、地域の連帯感や社区を大事に思う心が養われ、その結果、地域内の河川や田畑の水環境を改善するという意識が生まれた。しかしながら、その意識を実現するために必要な資源を、社区単独で獲得するのは難しく、その結果、河川や田畑の水環境を改善する資源を有する日本人の専門家と連携をしていくことになったのである。このような意図せざる連携の構築は、竹門社區・詔安社區や「鐵馬駅站」や南紙社區の「卸鹽台花園」でもみられている。竹門社區での「鐵馬駅站」の取り組みが、その周辺の詔安社區に広がりをみせたということや、南紙社區の「卸鹽台花園」を造成するにあたり、建築家などの専門家との連携が図られるというものである。このような連携の広がりが、いくつかの社区営造にもみられたということは、意図せざる連携の広がりが、地域活性化の方向性として一定の可能性を持っていることが示されたといえよう。

次に、地域内の限られた資源を活用することで、自らのできうる範囲での地域活性化が展開された結果、その地域での住民や関係者の参加が促されるという、地域活性化の方向性ついて検討してみたい。実は、これこそが、社区営造の地域活性化としての大きな特徴であると考えられる。どの社区営造の取り組みをみても、その社区の中の資源を無理のない形で利用することで、地域住民や学生が参加しやすいという雰囲気をつくっており、このことが、社区営造を継続的に展開していることにつながっていると考えられる。

本研究の問題意識は、地域住民が積極的に地域活性化に参加する事例として、台湾の「社区営造」を調査し、地域活性化の方向性や、地域活性化に取り組む人々の考え方を明らかにすることであるが、今回のヒアリング調査で取り上げた社区営造の記述によって、その問題意識は達成されたといえる。ただし、これらの事例は、台湾でおこなわれている社区営造のほんの一部であり、しかも、台南縣という限られた地域でのものでしかない。今後は、より範囲を広げて事例調査をおこない、社区営造の地域活性化としての方向性や考え方について包括的にとらえていきたいと考えている。

参考文献

小室達章、岩崎公弥子、後藤昌人、中田平（2010）「産学連携による地域活性化プロジェクト」『金城学院大学人文社会科学研究所紀要』第14号。

台南縣大内鄉曲溪社區發展協會（2006）『曲溪社區導覧手冊』台南縣曲溪社區發展協會。

台南縣大内鄉曲溪社區發展協會（2009a）『曲溪社區導覧手冊－動物編』台南縣曲溪社區發展協會。

台南縣大内鄉曲溪社區發展協會（2009b）『曲溪社區導覧手冊－地形地貌編』台南縣曲溪社區發展協會。

台南縣政府新聞處（2008）『愛與希望　台南新故鄉運動』台南縣政府。

土溝農村文化營造協會（2005）『水牛起厝』土溝農村文化營造協會。

参考URL

南台湾農業再生；http://eng4rr.swcb.gov.tw/

南瀛總爺藝文中心；http://tyart.tnc.gov.tw/

台南縣政府新大同社會營造中心 南瀛社區通；http://hometown.tainan.gov.tw/

台灣地方特色網；http://www.otop.tw/

台湾の参加型まちづくりと震災復興について；http://www.gakugei-pub.jp/judi/semina/s0506/